

乳
淚
集

著 羊 帆

223

518

088075-000-5

特63-565

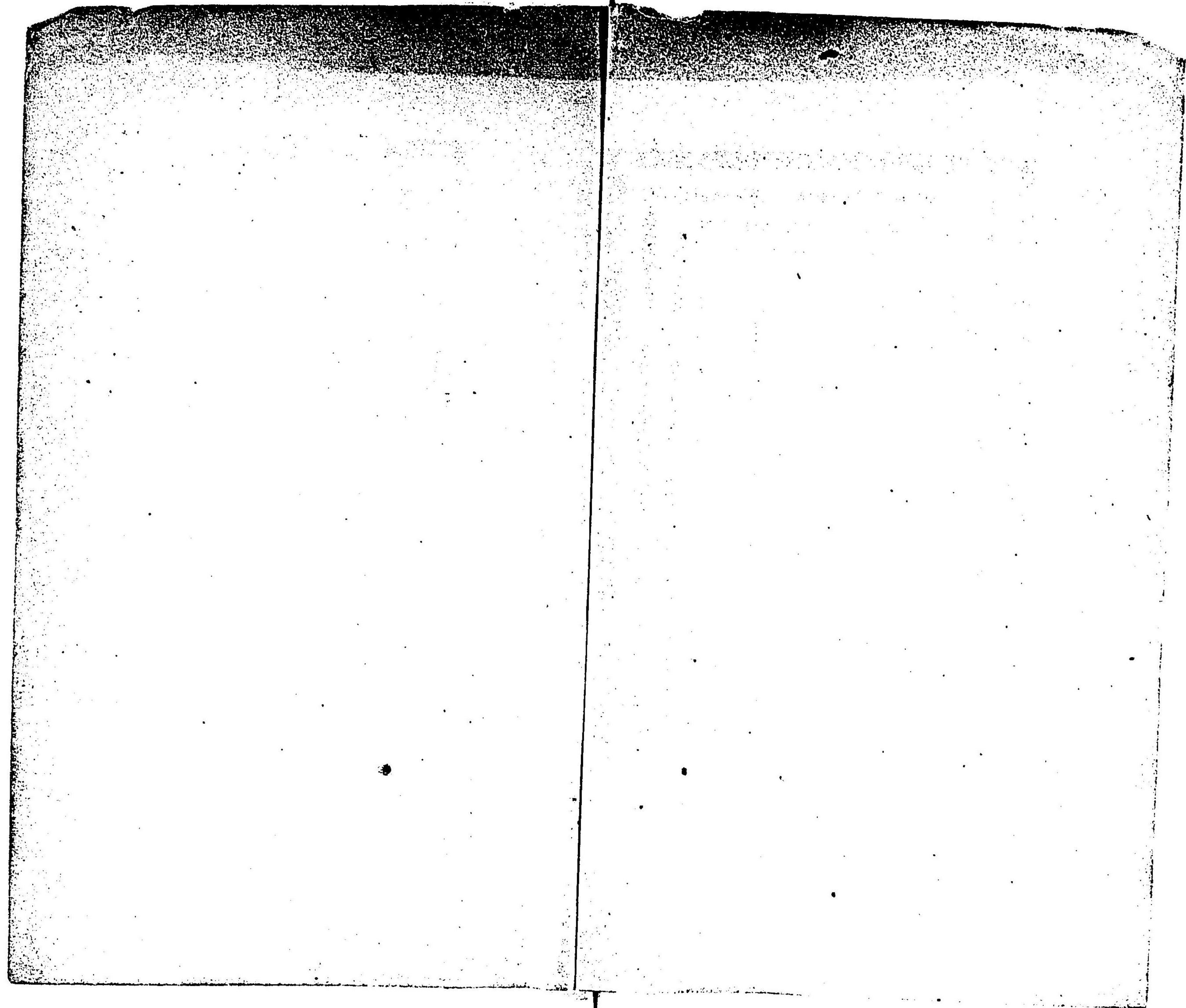
乳淚集

帆羊/著

M37

DBG-0172





特63
565



戦ひの歌	二二	鳥を慕ふ	一
自然私語	二一	野村の悲劇	三
		園お	九
		精阿茶歌	一四
		微音	一五
		小さな答	二〇

にうるゐしふ 目次

明治
37 7 21
内交

草稿日付

37	36	37	37	36	37	35	33	33	年
2	10	1	4	6	4	8	5	9	月
22	23	4	24	14	8	1	21	29	日

廢道の老松 六一

昏倒 六六

朧月 七二

包れをとめなり包がこゝろ 七四

左左衛門 七五

上 額の波

下 月乃夜

理頌歌・八一

簷端乃月 九五

徒花 九八

34
3
11

36
12
17

37
4
3

37
2
7

35
10
4

37
6
19

37
6
27

37
6
19

佇立 二四

自己格闘乃わづらひ 二五

ここをとめ 三六

覺醒乃罪 三八

神滅境 三九

死の首途 四八

春光 五二
をとめごゝろを人間は 五三

流動 五五

秋は音信 五六

漂泊 五九

37
6
27

37
3
8

37
1
30

37
6
20

37
5
8

35
9
16

34
3
1

34
5
23

32
9
8

37
5
15

乳涙集

鳥を慕ふ

帆羊著

人はにごりの地にはひ
からすはきよき天翔る
白き面わふくらぶれを
黒き羽翼のけだかさよ

月と東の山が端出で

鳥の宿にかへりゆく
さやけき影にくらぶまば
著るき聲音のやさしさよ

心驕りて畏なく
心鈍りてへつらへり
人の御天よのぞみたえ
鳥之神乃裾すそによる
鳥よいづちかへりゆく
み寺の杜ふ母まつか

しばしをおくふとまりて
杉乃若葉れ幸さいを語れお

若柳河畔の悲劇

神も苦熱あつさよみるゆめの
流乃岸の柳蔭
まぶいわけなき里の子乃
來りてひとり戯れぬ

うふもゆめのすがたかや

かえづのおるの少あして
さくらく瀬々乃さゝやぎの
くさ蔭なくて應へ顔

ちひさきむねのてだておそ
げみ夢のまの風情おれ
いさごをわけてほる池の
あるじの誰ぞや神の子の
ちひさき池のめぐりには
小石をつみてきし築き

此世のそこのわぶつみか
わきてみたしてあふれです

池のあるじはたちいで、
柳のかげのせゝらぎみ
獲たるは何ぞや小救主
よるあびひさみたちもごる

綱と蟹は放たれぬ
あるじも幼きわだつみふ
やがてあるじとそあされば

足あるかよはとひのがる

六

悲くや残る鱒おそ

つばさのもてご籠の鳥

人よ飼われて歌ふおご

ごろにもぐれごはてぞあま

もどより魚のみおあれば

かごの空ある水乃あか

吾よつばさと願はねば

小池とむしろさちあれご

さしも鱒のがれたさ

餓^か渴^きにたへでいらたてご

限り知られま壺乃うち

めぐりめぐれごすべあけれ

夢の戯^たれ兒^かの戯^たれ

いひもをいらばおれぞあの

かあしきも乃何ありや

さて毛^み神^か工^さぞ恨めしき

七

時の渡りぬえかすがよ
 焦くばかりある夏の川も
 神の御袖ふたつ東風の
 柳の蔭のいつかかや
 をさあごのいまさりゆかん
 池も鱒をあらばおそ
 其れ日小池に残りたる
 魚は行へをぬれかする

湖畔の園に

波紋豊富またそごまつ
 光はおちぬ小湖上
 つゝみづもひに夢誘ふ
 林乃奥の草笛や
 蔀豊満にみのれども
 わが頬いつか紅さゝす

葉蔭にあをき智慧の實は
試み乃夏おちゆかめ

淡く此水たふるを
懷出辛き世の激波

懊惱乃眞夏堪へかねて
いねざる夜さへいくそたび

とづかしいかな此なげき
戦ふ努力いづみぞや

さあれいくつか完た珠
成功れ御座に輝かん

息ふは林檎樹の蔭よ
優しき鳥の音を籠むる

鳥渡りて日はかなた
鳴の音遠く湖はけむる

こゝに矛とさふよやむ

故郷のかた雲はおほひて

三

朝の命

朝毎われに生命あり
そと何なれば夕毎ふ
烟と深くたぢあめし
心の灰にかへるらん
奇しきと光いづあせも
わか行くさたを照らせごも

晝となげきれ巻ふて
休息の夜あそあひしけれ

身は血にあふる杯の
傾けつをす活力さへ
胸と生くせも主宰なき
軀は石に似ぬりけれ

されどもひるえわれしらす
精勵の征矢に立て置けれ
傷と襟に花彩の

三

徽章咲くとも萎れたり

一四

朝毎われも生命あり
きなり朝毎生命あり
暮るゝをまたで消え滅する
蜉蝣乃いのちれよし淺くとも

精勵安泰歌

宵に精魂消え滅ぶとも
岡の邊永劫百合花咲みつ

自然兒吾沈着て勵めば
裂けなん胸ら安泰くある

微音

或夕暮のおとありき
あにとえなしのいまの身を
天にまかする念にて
水の流るゝそれならで
しづかにうつるたそがれは
温きひかげにゆあみしをれば

一五

聴き澄ますとにあらねども
とほくかすけくおれづから
ものゝ音きおゆ心地せり
むねのわづらひ仄かふて
何のあやにやかよふべき
かく意なき自然まで
われにしらべをつたふとは
あゝ拙なくてすごせ里し
胸に涙乃かゝるかな
其詞さへ分きがたぐ
いかに思ひをはすれども

いかに心を碎けども
あざむに似たる夕鳥
ゆくへを問ふよよしもなき
あゝ涙もて償ふを
過よたる何のわが罪ぞ
想の門よ立ちつく
あの時を彼の自然なる
あのもかのもれ聲きけば
現時をそしるに似たまけり
汝の老いたり憔悴けたり

汝の幼なし將弱わし
汝の平凡な將鈍し
汝の驕れを懷疑へり
汝の罪なり安すきなし

さしも微のさゝやぎの
かくて詞のたえざりき

涙を袖に覆みつゝ
合點顔のうら若さ
感想敏捷の憶着

琴柱に糸は断えけらく
よくや調べの汝が胸ふ
風れ心地に奏づるを
其とひゞれにし壺の音の
ほのほよ身をばおがすのみ
あなあはれなる青年よ

血汐は通ふ誰がむねれ
みだれざらめやおれをきゝ
熱き涙のわきくゝて
胸とも腑ともわかぬへふ

みなぎりかへるもだへの血
天よも雲のいざよひて
雲と雲との格闘の
闇よ暮るゝを見たまし
或る夕暮の事なき

小 さ き 答

地に生ひませしきみなれど
み天の星と思ふかな
そらにあれども其の星は

野乃花ごしも思ふ哉

恵みをたれよ此乃子等に
草乃睡まきげのはやぬれぬ
きみをみかねてうつむけば
心も空にまごふなり

自 然 私 語

花乃誘へる水なれば
微笑えびて谷間をいづるなり

啄みおとす一片に
あひつれだちてかへりゆく

戦ひの歌

軍おそと罪なれ
罪おそはいやあ優くき
勝てば笑ひつよろあびつ
雀躍しつゝ酔ひ痴れつ

競争ぞなくば天地よ

星の宿も何の意味
苦患なくば人れ世よ
妙しき調べも何の香ぞ

されば此れ日よ大空の
北斗もいとかがやきね
今人乃世乃ゆめよ馳す
自然の現示さなん

墜つる星あり傷ましき
整頓乃調乃大捷や

軍あそはげよ美はしき
戦へ

ミューズの神は御前にて

佇立

神乃旨うかひえすと(も)
わがなやみ深く探ぐれば
おれづから湧きくる光
人繁き市乃妙じさ

自己格闘のわづらひ

苦し現在罪乃煩患
餽舌は何の慰籍
諧謔も途のくるしみ
外出も愁ひの家居

筆の折り紙は焼くとも
三寸の舌ぞけなげに
いづれよりわきたつ泡か

風に舞ふ浮薄乃踵

二六

友遙よ吾をうれへつ

近き友なほもあはれむ

くかすがに身はすてねごも

慚愧乃涙したゝる

いかなれば夜々の涙ぞ

技をさる霜葉の如く

いかあれば夜々れ夢

秋空に雲舞ふごとく

務勤それ何乃意や

思索さへ業れ一つぞ

捨つべきは浮世れさがか

世のみよもあらざりけらし

念慮去れさらばもだへじ

詩案止めよさらばあげかじ

其言葉優し唯君

いたづらに血や冷えぬべき

二七

初戀乃泉は湧きて
思ひおそ絶えず流るれ
斯くて世に長らふるさへ
春の日乃神の恵みや

我神は常にあれども
答あつ情ぞ著るき
此の痛手もしやあからば
空洞ある士遇にやあらん
答おそ浴みす心地

悶へおそ纏ふ綾あれ
あかくにひとやを脱くる
名残まで惜まるゝとは
過渡あれやあゝ過渡あれや
吾さへも筆を握れる
此期はや終りにたゝば
狂もぞ世にみなぎらん
沈淪の闇きなやみも
又は世にときめく幸福も

此生命織れる綾あそ
死よ死死乃綴目よあれ

いふ道を星と云いは
なま業は更に空あれ
かくとだに兼ねて知りせば
いつはやく死よゆかましを

品性乃高きかを望め
沈黙乃花にあまそや
啼く蟬の羽をかれく

嘲り乃的よやたゝん

人走る市乃真晝を
野乃やみの心地あそすれ
籠乃鳥鳴きて歌ふよ
なかくよ檻ぞ幸なる

誰か看る市乃小走り
此間に深き造化が
恐怖疑議争闘憂悶
刻るや彩華はなたちばなと

願みて已を忘れ

或時は人を惜歎むよ

行く春の身を乗すをや

蝶とあり香にとまらんか

髪垂れてひたひにかゝり

夢乃せて道は行くことを

堪へがたき現ふ泣くは

何か身お生命乃裝飾

白雨の我身おあどや

うるほひの光を知らず

夏の樹の我身もありや

緑葉乃さかえをあらず

斯くて吾今や罪なれ

斯くて吾今や花なれ

若き身と杞憂と枯れん

慰めの杯を假せ

苦みは苦みをうみ

わづらひはわづらひをうむ

此鎖何か絶つべき

われのみ乃なやみにあらし

乏き想ひ血に絞理ては

さてを何歌のおぼろは

鍬探らば野にみつるあや

土かゝば眞理の詞華

生活の波打際に

誰が捨てし道義の小舟

苦き香の目よと耳より

腸のたゞよひあるく

其も我ふ何か教ふる

見よ野邊はたがやし予へぬ

甲斐なさの腕はあれど

パンを植う岸おそあけれ

成人よ青春を誘れど

美神あき君が血は冷えぬ

此時代よ愛の義勇者

此時代に奇矯の聖者

差別なす世は各に
獨特の琴や弾くべき
生涯を矛盾に殉し
此胸の主宰は迷ふ

ここをこめ

きみを心に浮ぶれを
野あわすれたるわすれぐさ
さやよ知れごとを忘れ草

いづべさぐれごとをなき

そのあともあき野の路に

心許無く咲く花の

蕾のまゝよほひでぬ

よわき未咲の花おそは

たをらるべしと思ほへず

處女心とおもふなり

ひとにみゆとは思ほへず

永劫の處女と思ふあり

覺醒の罪

身は行く春に涙わき

あごあゝの夢のくづけさを

さめあんとてさめがたく

さむるあごあゝの惜しまるゝ

わかき心は夜の夢

まぶたをあかば今し世は

罪顯はなる晝の日の

かへりみらるゝわが現

花真晝にえ染むることも

夜の闇暗く褪あすること

夢よかひあくさめはてゝ

處女ならぬ身いかせん

神滅境

戀愛の名に依りて神を見たる青年の今夜其處

女の祭壇を新郎乃手よ委ぬ苦悶

いづみか花のなからめや
いづみか神のなからめや
あゝほろびゆくわが神は
花のやどりもすてぬらん

四〇

神はわがみの生命みて
花の暮れゆく春晩く
生命は風よ墜ちたれば
吾や屍體となりけらま

かくても君の生きたりや

かくても君の生きたりや
はな乃すがたのわが神よ
神は死しても生命ありや

二

咽ぶと何の罪なりや
心の文字を誰かよむ
あゝ此胸を誰か窺く
くもでに亂る此あやを

悶ふは何乃罪なりや

四一

罪のそもあぞ罪なりや
今日より神は失せぬべく
世は光も無きも乃を

四二

さても神なる君は生く
神なる君は生くべけを
神は亡せても生くべけれ
ほゝ笑みて世に誰とは棲む

三

酔へるが狂ふ此血汐

昨夢のゆめのあとにかも
そもや眼に映るふは
迷うてあゝは誰が垣根

浮世の辛さ身の辛さ
むくろは虚空にさまよひて
御体七重の壁の中
神の姿ぞ人目避く

真如の月に照らされて
遅々たる歩み地に接かず

四三

目よ見ぬ神の裾すがる
手を拂はれま思ひ去て

四四

四

神は姿は情にて
情の神は戀なれや
戀の様にもあらはるゝ
吾か信念おそはかあけれ
うせざればおそ神ならめ
亡ぶる神もありや世お

おどてうせゆく我胸に
永久の御姿彫みたる

亡せ行く神を吾れ仰ぎ
亡せざる胸を抱へ泣く
交際乃喙の齟齬ふ
世は欺きの象おれ

五

色摺纏ふ神然らむ
今宵は笑みて在すかや

四五

やがて御輿轟かば
雲乃彼方にかくるゝを

今宵はるみておはまかや
誰れか雲間に隠くる身ぞ
茲にまもべの胸はさけ
魂ぞ軋きて碾かるをば
わが神ならずあゝ今宵
處女にあらまあゝ今宵
神は何處に亡せゆかん

神は何處に亡せゆかん

六

誰か姿を妙といひ
誰か今夜を賀づるなる
自然も今は仇なれや
子孫も今は仇なれや
されども神は我主にて
主の戯れは吾歎き
主の歡びは吾生命

主の滅びあぞ吾もたふ

操はいとこい高砂乃

其浦風もすすびたり

祝ひ乃歌か彼の音は

神の滅びを祭る哀譜や

死の首途

死の門今は近きぬ

見れば扉は開かれぬ

門握る努力には

あまりに落ちま此の腕

誰か来りて閉ざすや

誰か来りて閉ざすや

生命のわづら深くして

さしる惱はいとほげし

濃き夢路よはあせれども

命運ならぬぞわびまけれ

誰か来りて支へずや

誰か来りて支へずや

戦慄^{おの}き恐れ祈り詫び
賛^{えん}も誓はん歎きぞや
み乃儘夢と絶えもせば
神の慈^{あやま}をいづち見る

我爲め友よ祈られよ
我爲め友よ祈られよ

怨恨^{うらみ}は遠く深く湧き
流れて死までつれだちぬ
あゝ彼れ時も此事も

科^かも今はたわまれなん

笑へ兄弟^{けいだい}オー來れ

笑へ兄弟^{けいだい}オー來れ

凡て楽しく暮らせるも

又^{また}苦かりし其味も

俱なひ行かじ彼の陰府^{かげり}に

さては何をか愛づべきぞ

思へば果てし明日のわざ

思へば果てし明日のわざ

涙も乾わき血もあせぬ
 冷え乃み持さる身を持ちて
 希望のすみといふは何ならん
 光ふ替はる暗と知る
 さらばよ君に委ねまし
 さらばよ君に委ねまし

春光

ひが去をみればやま〜かまむ
 むしのはさまのをぐらきとあろ

おとづれもなくあせをへま
 ひとにしらぬひめごとやある

ゆきこみもせずしきをどくあ
 はるのひかりはわかなたもえぬ
 ひがしれおくよわくいづみあり
 あふれあふれてよまへにまへと

をこめごころを人間はば

をこめごころを人間はば

かざしの花とあたへてん
よきおしろみふ問ひてみん
をとおとろのはかなさは

憂きも辛きも高嶺ある

短かき春の花一枝

装は罪も文あさん

やめよをさあき世乃道を

たえて涙の零さねど

知^しりていさても泰からず

かぼそき胸の溜息に
いつまかやわが道難き

流動

海乃日と

こもよおちゆく

くものまがたを見まやさみ

ゆくゐるの

ちくさよやどす

葉末のつゆをみまやきみ

わかき子の

むねよりむねに

あゝろのかげをみまやきみ

秋の音信

無題

里のうなるの舞を果て

打つやつかみの音もほがら

水面の鏡つめては

秋の音信聲高し

命短かき鳴く虫の

聲も次第に細りゆき

かひなも脚もゞぎれてと

秋の音信哀れなり

あはれ里川誘ひ行き

秋の音信遠く傳へよ

柴おりぐらす柚が子の

野邊乃睦びも荒びけり
隼はやぶさ高く翔けりてと
秋の音信音もすごま

小蝶よ底く野にまよひ
今蕎麥そば花はなの上の上の來きぬ
露の命のかつしばし
秋の音信静かなり

秋の音信今はた
海に巻よ野に山よ

迷ひは我ふえた君に
いた君よしも告ぐるなれ

漂泊

涙をそぐ花もあらず
愁をみたす野もあらず
飄々と去て身ひとつを
風にまかする萍や

胸熱かふもえさらば

人心こころ頭かぶは浮う廻まわらずば
坦々たんたんとして行く道の
かゝる憂うれには逢あふまじを

峻つとの志こころき峰みねを攀よづ時ときも
又またと開ひらけし野のに入るも
咽なび入いりてと衝つみあぐる
襲おそふの闇やみき晝ひるのゆめ

誰たれも興おこふる此世このよかや
誰たれが爲ためめ人の情なさけにて

憤怒ふんこに怖おそれかゝる今
星ほしも誘よるさうたがとる

いづれ家路けちは急いそがねど
星降ほしる野路のちも住すみ兼ねつ
行き暮くれる雲くものたゞすまひ
いつまで空そらは漂たふふやらん

廢道の老松

廢ぶれたる道ちを誰たれが懐なふ

通路の名残並みたてる
 幾千のときはぎ年舊りて
 たとへば法をぞ説くといふ
 其名も尊とき故寺の
 盛えし昔を思ふとも
 詣づる由だまなかりける
 長き御堂にも似たるあり
 白づく夕日の照らしては
 紅染めなま松が枝よ
 懸かれる小琴か嘈々々ど

松籟奏づる久方乃
 自然の聲さへ限りなき
 恨みどころはなれ枝枯や
 伽藍の柱と老い朽ちて
 梁危ふく浮く雲や
 御法は絶ゆともしかすがに
 宵の明星の影刻む
 御帳の寂れおほはえや
 自然の旅路にうらぶせて
 燃えにぞ燃えたる胸底の

饑渴を癒さんよじさらば
 松が枝より垂る香も高き
 下露なるらし此小川
 傾け盡くさん源に
 滴る色彩探りもて
 なつかまいかなや此奥に
 み天を衝き地をわたかまり
 すさまじき夢を地にたるゝ
 天工妙じかる老松の
 響ゆるあきやと藝術兒の
 いらだちでもしやとふあらば

あざけり答へと里の子よ
 何を好みなす愛人が
 右せ新らしき道踏まん
 まづ拂ひ去せや散落葉
 まづすゝぎ去せや旅の衣
 さらばぞ語らん非すと
 知らずや彼方に行く流れ
 常磐がよはひのいとふせる
 恨みを絞りて涙川

他人^{ひと}掬^くび去^さるにえ堪^たへんや
あゝ尊^たき伽羅湧^{がらう}く泉^{いずみ}
秘^ひめ果^はす妬^{ねた}松^{まつ}にあり

昏倒

詩人なる青年が隻愛意中乃人の成熟の期を悲みこ
送^{おく}と示^しす歌

噫^あ真^ま意^いなき人の歌
戯^たせもあどか情^{なさけ}ある

思^{おも}ひて實^まよや燃^もゆる火^ひの
文^あなく亂^{みだ}る果^は敢^あなさや

ふるひをのゝく我^{われ}魂^{たま}え
かまらも痛^{いた}く手^てをたゆく
硯^{すずり}も筆^{ふで}も紙^{かみ}はへも
熱^{あつ}き涙^{なみだ}ふ乱^{みだ}るなり

思^{おも}ひは星^{ほし}のかずもかき
誠^{まこと}の花^{はな}に過^{あま}ぐきども
あな筆^{ふで}とをば何^{いづ}邊^べより

雲よ嵐よあぢきなき

六八

止まれとてし止まらず
送風野邊に落つること
ふでよ望前に我が想
空のかなたに見失ふ

あゝ我がゆめは誰か爲めに
かくばか望なる力ぞや
激玄く勁く荒ぶとも
思ひはうちにあふるなり

慕ふも苦るし君がへに
水去りゆくも妬きをば
涙の川の水上に
身はうらぶ望のかひなきや

清く小さき泉あらば
君掬ばんと思さずや
わかやくやさしき岡あらば
君息はんと思さずや

六九

君が心の底ひより
湧く泉をば汲みしかな
君が胸永久うらわかき
岡べにわをば住ひまか

泉いつまで清くして

いつまで若き岡べぞや

常夏の花さくとても

荒をすさぶらん時期悲し

あゝ歎くとも詫ぶるとも

あゝ絶叫ぶとも甲斐なきか

足摺くつゝもぶふをど

はたちぞ來にし君が春

自然乃上に輝ける

尊きみ星もあるなをば

君が心は花の花

地をばはなをてにはふ花

星はあれども攀ちがたし

花はあをども摘みがたし

其は清くして高けをば

七二

いとたへがたき夢乃あさあけ

舊義捐小説(文藝俱樂部増刊)所載捨扇の二句を

襲用せり茲に記して責をあきらかにし且つ大方
に多謝し特に高著者に免を乞ひ奉る

朧 月

心詫ぶるとても君がみを
歎げくやとても君がみを
君と涙も沾せ果て

血に絞るらん其溜息

花曙に匂ふことも

月夕空にすむことも

君が心は眠ります

み墓の人に達はぬか

嗚呼胸痛む君が爲め

いくその年月を案へども

逢ふに語るに曇りたる

君が愁にぬせぬ日ぞなき

吾をこめなり吾が心

七四

吾をとめなり吾が心
君が思ふに任せたり
よし紅の花ならば
君がかざすも随意あらん
然いへ狭けき此胸に
愁をかくるおとなかき
皆人の見る夢にだに

微かに底ひ満溢る

空左衛門

上 額れ波

あたま禿げたる空左衛門
腰はあづされ弓となり
肩に番へる其鍬と
げに年齒を躬く征矢なをや
しわだらけなる顔だして
ゆがめる口にうまくいふ

七五

話自慢の癖なまご
嘘といはずと誇るも癖

わが門のひさしに立ちて
朝雲のあるかなきかに
一日れ天もさだめも
占ふやそをも自慢の

大丈夫と門出勇まし
あたらぬもあたるも一日
雨に濡を風に吹かせて

幾年かまわにゑりたり

あゝ今日までも歎かつぎ
ごしの老いたれ彼をも亦
額に刻む百瀬の
峻しき道いたごまにき

草深き畦を枕に
寝ねて今日も夢を見たりや
斯くねむり斯をして暮らし
昔も今も左衛門

下 月の夜

或夜月よく山畑に
夜勤といふにあらねども
常の如く鍬荷ひ
茅屋が軒をいでたりき

老いて再び花咲くは
頭に照らす月影か
健げの腕肉をどり
高くかざすぞおをや枝

月に泣き去る若者が
戀のなげきのそをのみか
かきを見よ汗と思ひきや
老の袂に散乱る涙を

あゝ懐出のいとけなさ
何なを今も此鍬に
坑を掘るむくろをうづめ
このまゝうせんと思ひけり

つらく草は露を見て
 五尺のからぶ何かして
 懸かりては消え消えてのかかり
 行方も知らぬ風の餌や
 斯かる想ひにいたく更け
 歸る家路もたゆたひし
 然せど宿りの外や何ある
 懷疑ふあ
 健げにかせぎ年を送りね

理頌歌

人深淵を測らまじ
 さなり深淵測らまね
 思うても見と手は憑りて
 唇に憑り此底に
 潜り入るにの器過ぐ
 有限は鱗を持たる魚
 さなり魚なま生滅の
 波打岸ふ旦夕の

藻に住家をばもとむ身と
 のかどえすして能く人が
 深淵の名もおどましや
 さてもいくばく徹透の
 頭腦にあやは驕るとも
 嗚呼汝が文に口に手に
 又思意よ何をせぞ
 わがも乃がほに濫するや
 人徒よ糧はなく
 暮四をまが里てとつかに得

茲に汝は胸乃かて
 苦味之路傍に捨て去りて
 其は秋風は蝶の舞
 自ら羽振りのたをじぬ
 そをかや弱を感は舌
 滋味辛味さへ容れがた
 げよ不都合なる臍腑もつや
 甘味はよたかおれよからん
 おれにてやうやくみ
 無限はそれもとつかみ
 影の影背む人おその

實に不都合に出来上りたれ
否否何も不都合ならず
無限さそは人に不都合なれ
人真中を歩むといへば
小田も畔狭も端ならず
雲も蒼穹も客ならず
夢も涙も空虚ならず
皆わをよりの姿おて
むかぶ山も
ひれふ野邊も
うちわたす海も

たわが爲めにありと覺ゆる
然るにたしかに己がまへに
明白は象もあらとれず
輪廓もいとおぼろかに
彼は万象に目を通し
又は己を無たも終に
思ひ設けて微かにも
心の緯の迭た梭み
是と彼とが靈妙の
推移の影を經となし
無象のあやに記されつ

かくてをなほ不都合ならずや

さこそあれあが人の身は
限と名なのる楯たて杖え以て
僅ちがに支たふ露乃魂
碎くだけば液みと名なのりいで
彼の人よれみ授けたる
矛盾まひんの想その神の慈悲
たえぬ生命いのちは以てりとも
其は我が云へる限とある
名ある人にとあらずして

とるかにあれが域越えぬ
誇るを甲斐あや汝あらず

人こそ彌に哀れあれ
幸福さいふくを願ふとあせるを見れば
天地てんちの筋目すぢめ整然と
道たがへぬに似たれごを
深淵ぞ深淵ぞ
あゝ吾をうかッへ
砂糖の味も折につけ
同じ甘味かんみは變らぬも

苦花に劣る味ぞかじ
 甘味と見れば皆其れは
 快よしとは思ふかや
 否さらじ否さらじ
 甘しと快しと異なるを
 そこの理
 快しとれ皆それと
 満足ありと思ふかや
 満足はそれ五は五にあらば
 快よきにも劣るべし
 快よしとの我が其れは

現在にふ時の太柱
 未来と過去と刻みをと
 鋭とた香にぞ香ふなる
 對觀の岸の花のゑみ
 假りに自己ふ數ふたる
 まこと乃すがたそをやそれ
 こととりや人行きあやみ
 永久自己よ里寄りながら
 苦くうたてく眉ひそむ
 人乃境の巷をば

深山の奥に縁濃き
 雲乃小闇と差別たて
 一は清しと崇めあふ
 一は濁りとあかくに
 おのが味方をあざれる
 人謙遜深くうただるゝ
 其の思出ふいさをあらん
 又之隻戀うらぶれて
 若た心に智慧さかり
 己が看方の高きをば

神よあらねば知るよしをなく
 潔しと思ふ情人が
 小女の胸の蔭さと里てと
 罪を無限と誣ひ深き
 勝手ある勝手ある
 有限の人のはかなさや
 無限こそ無限を知るあれ
 あゝ人はたれ無限なる
 記と名とを能ふのみ
 そはもて名なる記號ある
 魂の人にぞあてければ

人こそまこと悲しけれ
種々の記號を假り用ひ
此無限をば傳へんと
涕淚滂沱わぶるを
そは甲斐ぞなき本來の
無限ぞやがて無限ある
單調出で、屈折の
路のはたてに至りつき
尚行くさきの榮とて
無き過去をしるべとし

あらの盤石をば杖とあし
有限の胸の徑ほか
その調とてかひぞあき
されば人をばみちびくに
とけ與へがたきみち乃は
又とあさばの光弱く
よしやうちには溢るれど
或の岩根に枕して
悲哀乃幕は深くさぢ
其の影をだに足がむねの
表にとむ術をあみ

つたふ名さへも表はれず
ひそむ光もあざぬらん
又の其幕よし黒く
きらめき走るいあづまの
白き光の文字一線
高く無限の其名をば
かゝげえたるもあざつらん
よし其名あるしるまなる
人の象の吾れにして
自然と名づけ又我神といふ
其は置く露の胸底の

瞬間の永劫に彫るばかり
あゝ渴仰にえたへすな

簷端の月

新らしきものは舊りたり
新らしきものの舊りたり
行く水行く水いましは
何をか語りて行き過ぐ
新らまからずば汝が胸

舊^{ふる}見れと住み見れ泣き
旅よ里かへりていまこの
舊^{ふる}見し繕^{つくろ}ひを見んとは

舊^{ふる}して新たなる見が幸福^{さいふく}
もちとなか／＼にさびまし
涙と袂^{たもと}をすゝぎぬ
傾く軒端や月すむ

あゝにハの泉かしこの
をかへぬ舊^{ふる}きを吊らひ

面^{おもて}をそむけて過^かりつ

そとぬぐふ事もありまか

舊^{ふる}きとあらたよあゝいつ

涙は限^{かぎ}なくはふりぬ

こづくにのゆめやいかんぞ

パピロン古^{ふる}丘^{かき}に廻^{まわ}る其春

徒花人物

青年哲學者	漁翁
ケンジロー	ハチロペー
新人	漁媼
トム子	ハチロペー妻
青年詩人	産婆
カツヤ	ハツ婆

在のさぬ所とてなき宇宙神、或時雲乃上にて其全能力を以て未だふ混沌晴れぬ人の世を清めんとて一人乃天使女神を人知れず否其女神其も終さへたえて知る由もなき様下界に降す事とした、神にと其事實はやぶて詞であつて其の意味ハ『汝、人に行き新人たれ』といふのぢやうだ……………一の砂白き漁村に降した茲に漁村にハチロペーといふ正直者が其婆と未だに子あくして住んである。さうして上帝は必ず一人ハ美女を授け吾が子にたまふ

事とかたく信じて居る……………或時波打際ハ波濤よひきさらせられた様を風を一人の氣絶した七ツばかり乃小女があつた。さあ確に神乃授ものとの信じたがさすがに警察に届けて定規の手續を履んだがとうとう主はあいほしくばやると警察からハチロペーに下げられた時の婆と二人の悦びといつたら無い……………名をトムとつけて、いぐむ……………脊丈けものび色のちと黒いが顔も愛らしく氣高い事といつたら天下きつて無き前髪のみさも人思ひする十二の夏といあつた。此時青年學士乃ケンジローといふ今年とつて二十五の哲學者あるが此濱江みさすらつた。新人トム子を見るより酔うた。浮世のもろこの異ある。戀でない、たい信じたのだ理想たのよすぎない。此情あまもみ清澄であつた。學士と持

説に矛盾を來すまいかと思はれた並の人ならばかばかりの事ならかばかりの事として別に悶をすまい、學士の毎日のやう濱邊にさまよひつゝ胸をかきみだした。自説のもと『男女共棲と天の自然である必ず誰と誰と云ふを免さぬ、さすまば生兒の始末父子の見分けに困るといふならば生兒の始末と父子の見分の煩瑣を省けば又天理なのだ世に現は此關係を生じなれば場合も澤山あるのだ』とい而るに、トム子丈に決して人と名の付いたものを共に棲まむべきでないやうな感じがしてならぬ但しハチロペーと其婆とと特に此新人にかうづく爲め無二乃信用を置く事であつた。トム子は學校から歸せばケンジローの手に付いて必ず復習をつづけかたぐして氣立ても素直にゐるはしも成育ち十六の春小學を

子へ、子へまゐるのも此あふり此漁師にしての親にめぐらまゝこそをも神の子と乃一念ハチロペー、婆の胸もあると、只管にたへたケンジローの推舉おもとつたらぶ。けれども此漁村を去つて都にまで上せ學問さすとのさすがよハチロペーの胸にと思ひもうくるだふ及ばぬのである『アーニ高等を終らせだの、宗屋モリヤの嬢とおらあトム坊ばかりだ、おをでもう澤山おをでもう澤山』最だと實のケンジローの方が却て大賛成、磯に枝垂れた松の樹を自分で羽衣の松と名づけトム子を其處につれて行き側らに立たしめてと目を曇らまあらぬ想像を走らせて目をしばたくすの、度々である。あゝそらに如何なる思藻かあやごらまゝのことであらう……………
學士けんしを研鑽、旁かれこれ茲に五年を過す……………トム子の歌か

ぬ時と名のつく磁石の爲めに十七歳の北が指される。學士と云うす
 く彼成熟の期に至つゝ事々氣づいては立つてをすむつてゐられ
 ぬ噫神の神であくあるの下のなからうか……………けれども學士の
 目ふは十二乃夏ふ見たトム子にちつとも變らぬ。變らぬ。時とい
 ふ版圖の刻々も別である事も知らぬでのなは、けれどもトム
 子の、トム子と神だ……………トム子の其通り實は浮世のものな
 り、神の大御心に依つて塵世の混沌を清めん爲めに選まれてつか
 はさるゝ程の徳を俱へた女神だ實に女神には從順はなかくに高
 り一乃徳であつたのだ浮世にと浮世の律法がある、凡ての歴史凡
 ての常習凡ての世間……………人と却て是を狭くとし繩墨ちまきと誨し
 つゝが神は目からはむまろすしをだやかなをかまがゝき律法

と見……………けれども亦ハチロベ、婆の、養子貰ふ沙汰と
 さあ、さすが、ひねもしゝ嫌だともいつた。……………が柔順の女
 神は從はずよのをられぬ。あゝ一度は浮世の母であらう……………
 是を見聞く煩悶は堪へざると新らなき眞理の發表とを兼ねてケン
 シローのトム子十七乃秋濱汀を辭して都へ歸つた……………遂に博
 士は稱号を得た其論の要旨と『人間に眞と美とは絶對的宿らぬ
 』とかうであつた

此眞理？に對する非常の稱賛を博した悦びと、流石に戀しきや……………
 ……新人女神に對する此秘密の理想とを自ら毀つべく、即ち、
 トム子をめとらんとの苦しき野心とを抱いて再び彼の濱汀の家を
 訪う……………わづかに其脊戸よりおこなふのだ……………嗚呼人

と早にもろくケンジローが去年は秋こゝを去つてから冬凌ぎにと
でも來たのか一人の髪もおどろおどろした二十越せるばかりの青年
詩人のカツヤと云ふが此漁村に來た自然の本堂を覗かうと云ふ程
の目は又格別でもあるが、又彼れにも……………眞乃女神……………
詩人はどうしのか途は此濱邊は一生を網生れて暮らさんと思ひ
立つ。どうく結婚を申込んだ胸中にかなる觀想に驚かすので
らう……………ハチロペー柄に無く却て信じて疑はぬ』と云つてト
ム坊に言ひかけるもの西より來るもろ西より來るもの髪乃みだれ
た筆屋』……………それがなんだか神乃示令でもある様に感じ、『少
しと柄と悪味が秀いで、氣高き（ハチロペーの目よも）うらぶム
坊の筆屋でも紙屋でも語度つれあふ。是非漁師で一生此濱邊に

くすぶるもれでなくつてもいゝ』どうく養子にした、詩人どう
感じたか、婚姻は翌、行方知れぬ……………出て予つたのだ
ケンジロー乃訪ねて來た今は其れから八ヶ月も経つたのだ
トム子新人は氣高き面であ、昨日、一春の昨日だ昨日のひきしま
つた唇、下見勝に、ほゝゑましげの頬、いま、いまはづ……………
けれども亦思ひかへせば辛き新博士乃胸よりの、より以上氣高
みがあるを己が嫉妬心おけされてゐる道理でいあるまはかと思と
る……………床についでをつらだ而も産褥ふ。蒼ざめた顔お思ひ
なしか半を冷笑をたへて黙して臥して居る側ふ。兼ねてケンジ
ローが知つて居る産婆乃ハツコハチロペーの妻が侍して居る……………
……………あゝ産褥　あゝ産褥……………『何時？何時？』ケンジロー

は聲もふるへてはひはなつゝ蓋し婚姻はと乃意であつたのだ。せめて其養子の吾に等しく且つ共み棲みてあれかしとも思つゝのど……産婆はしよげてはふ、『え、家乃トム坊のお婿さんが京乃詩作ととかやらでつひ今から八月ヤツキまへまああらう事かあるまは事か其晩一晚で出ちやあつた乃やろに、かうま床につきまはとはほんとお』あ、一晚であつた、あ、一晚……ケンジローの身悶したあ、もう花乃姿はあ……ケンジローの目はつひ、とぢた最早茲を辭すべく立ちかけた

又いつも乃羽衣の松に立ち、濱邊にさまよひ何なにやらの英語えいごの詩を吟んで足つよく砂を蹴立つる事であらうか又の更に新らしき眞理をもたらしめて都に歸り彼苦闘うっれ渦を衝く事やら……あ、新人

は神は何處どこに消せ行く事であらう

おは劇歌にも乃せんとして案じける下書のまよて徒花むだはな乃是ぞ

歎き乃一つか免したまへ

乳 涙 集 をり

明治三十七年七月十四日印刷

明治三十七年七月廿五日發行

乳涙集與附

定價金拾八錢

著 者 者 は ん や う

發 行 者 鳴 海 要

不 許 復 製

青森縣弘前市大字下白銀町三番地

印刷所 株式會社 北 辰 社

青森縣弘前市大字下白銀町三番地
印刷者 鳴海要

販賣所 弘前市親方町 近松書店

